

公立志津川病院支援業務報告

独立行政法人がん研究センター東病院
和泉啓司郎

- ・ 支援期間：5月2日（月）から7日（土）
- ・ 実働期間：5月3日（火）から6日（金）

【活動状況】

5月3日（火）：5月2日（月）21時過ぎにがん研究センター東病院（柏市）を出発して3日（火）9時に公立志津川病院仮設診療所薬局に到着し、小室薬局長とお会いし業務内容を確認した。診療所自体3、4、5日は休診ということで外来患者は来ないが、公立志津川病院（常勤薬剤師3名）の小室薬局長と柳澤薬剤師が6日に訪問診療をおこなう医療チームが持参するお薬の調剤のために休日出勤していた。東京大学医学部附属病院支援チームの高山薬剤師、自衛隊中央病院小山薬剤師（前任者）とともに今後の業務内容を検討した。また、6日に訪問診療する際に投薬するお薬を調剤した。

院外処方せんを応需する薬局がないために全て仮設薬局で調剤しなければならず、200人以上の外来患者の処方せん調剤業務と欠品医薬品等の発注の業務をこなすだけで18時を回る状況のなか、イスラエルやいろんな医療チームが置いていった医療用医薬品やOTC医薬品、注射薬、衛生材料等が倉庫部署に置いてあった。薬局のスペース（5×10m²）も狭いので、スペースの有効活用をすることで業務の効率化にも繋がることから、ボランティアに明日以降薬局内の整理のお手伝いをお願いすることとなった。



仮設診療所全景



仮設診療所



仮設診療所



仮設薬局



小室薬局長、高山薬剤師、小山薬剤師



整理する前の倉庫

- ・ 5月4日（水）：9時から女性のボランティア5名、ベイサイド・アリーナの救急診療の薬局に支援に来られている宮城県薬剤師会の先生5名、小山薬剤師（13時まで）、柳澤薬剤師とともに薬局内の配置換え（倉庫部分）と訪問診療時に投薬するお薬の残り分を調剤した。衛生材料や医療用消耗品等は薬局の外に置いてビニールシートで覆い、医薬品の倉庫部分を整理し新たな薬品棚を置くスペースを確保した。新しい薬品棚を設置することで今以上に薬局内のスペースの有効活用ができると思われる。また、支援する薬剤師のために薬剤配置表を作成するための準備作業を行った。



ボランティアによる倉庫の整理



ボランティアによる倉庫の整理



県薬の先生方による薬袋の作成、薬品棚の整理 県薬の先生方による薬袋等の作成

- ・ 5月5日（木）：9時から女性ボランティア3名が午前中のみ勤務可能ということで、薬剤配置表作成のお手伝いをお願いした。午後から県薬の薬剤師5名が応援にこられ、薬袋の作成、調剤棚の整理、内服薬の薬剤配置表の作成等を行った。公立志津川病院の薬袋等は流されていないために、いろいろな医療機関、保険薬局の薬袋を流用していたが、千葉大学附属病院薬剤部の先生が作成された薬袋貼付用シール（内用、外用、頓用）を薬袋に貼付し、印刷してある医療機関名を修正して公立志津川病院用の薬袋として作成した。

14時には聖路加国際病院の日野原先生を公立志津川病院の西澤先生が案内しながら薬局を見学された。西澤先生が日野原先生に現在の医療状況、医療スタッフ支援状況等を薬剤師の事例を含めて説明された。

- ・ 5月6日（金）：8時30分から公立志津川病院の3名の薬剤師（小室薬局長、柳澤薬剤師、佐藤薬剤師）、県薬からの5名の薬剤師、公立志津川病院の前の保険薬局に勤務されていたボランティア薬剤師の先生1名とともに10名で外来調剤を

おこなった。公立志津川病院の住所や病院名の印鑑も流されてないことから、お薬手帳持参の患者さんへは処方内容、施設名等を手書きで対応するとともに、持っていない患者さん（津波でお薬手帳まで流された方も多かった。）には必要事項を記載して新しくお薬手帳を発行した。一般名が同じでもいろいろな商品名の医薬品を使用せざるを得ない状況下ではお薬手帳は患者さんばかりでなく、医師、薬剤師にとっても非常に有用なツールであることから、作成には非常に時間が掛かるができるだけ対応するように努めた。

小児科、皮膚科も診療を行っていることから、散薬調剤、軟膏の混合の処方もあり調剤を行った。ゴールデンウィーク中ということもあり200枚を超える処方せん調剤を行った。



調剤室

医薬品保冷库

【支援総括】

- 公立志津川病院は大津波で全壊し、電気は自家発電でなんとか使用可能であるが、水はトイレも含めて復旧できていない状況の中で外来部門を仮設診療所として運営している。そのため、薬局（5×10m²）にある多くの備品類は支援物資として提供されたもので（調剤台：3台、薬品用保冷库：1台、調剤分包機：2台は東京大学附属病院薬剤部の先生が手配されたもの）、通常の業務を行う上ではまだ十分ではなかった。（ボランティアの方が作成した木製の医薬品棚（5個）も使用してなんとか業務を行っていた。）

乳鉢、乳棒、スパーテルも注文しているということであったがまだ届いてなかった。薬品保冷库も現在のものでは今後入りきれない状況にあることは想像に堅くないことであり、追加の薬品保冷库が必要である。

- 各医療支援チームが置いていった医薬品等で在庫品目が増え、5月5日（木）に内服薬だけの配置表を作成した段階で400品目を超えていた。被災される前には

200品目程度の内服薬ということであり、今後いろんな医療チームの支援を受けながらの保険診療を行っていく過程で、如何に採用医薬品をしぼっていくかがまた別な意味での大きな問題になっている。

- 6月には数十キロ離れた別の地域に入院ベッドを確保し、入院患者の診療を行う予定になっており、3人の薬剤師の中で1人は入院患者の調剤に対応せざるを得ない。また、5月の第二週で救急医療を担っているベイサイド・アリーナにある救急医療施設を閉鎖する予定になっており、仮設診療所で救急医療にも対応することになれば、ますます3人の薬剤師への負担が増すばかりである。数ヶ月後には別な場所に長期に耐えられる薬局等を建設することになっているとのお話であるが、マンパワーの増員が難しいのであれば、せめて被災前以上に薬袋作成、薬剤情報提供書、お薬手帳用貼付シール等の機械化を進めて調剤の効率化を進めていく必要がある。(患者さんから薬剤情報提供書を求められることが多かったが、対応できないということで断っているのが現状であった。)
- 新病院は都市計画とも絡む問題であるので早急には具体化することはないとのお話であったが、それまでの間、現行のマンパワーで業務を行っていくことは非常に厳しい状況である。少なくとも病院薬剤師全体として長期の支援計画を立ててフォローしていくことが必要と考える。
- ゴールデンウィーク中にもかかわらず出勤された小室薬局長、柳澤薬剤師には大変お世話になりました。厳しい状況下ではありますが、引き続き地域医療に貢献されますよう祈念いたします。